

文学館だより

令和 4年11月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文責 日高

朝夕めっきり肌寒くなってきました。
日当たりの良い縁側でほっこりお茶タイムなんぞ、いかがでしょうか。

たべのこしし飯つぶまけばうらつどふ雀の子らと日向ぼこする 牧水

第27回 若山牧水賞 奥田亡羊氏 歌集『花』

第27回 若山牧水賞が発表されました。

【受賞者】 歌人 ^{おくだ ぼうよう} 奥田亡羊氏
【受賞作品】 歌集 『花』 (第3歌集)
発行所/砂子屋書房
発行年月日/令和3年12月10日

鏡の奥にひと月ぶりの髭を剃る
空には竜の匂いがした



奥田亡羊氏

【奥田氏受賞コメント】

近代短歌の巨人、若山牧水の名を冠し、優れた先達が受賞者として歴史を積み重ねられてきた栄誉ある賞をいただくことに、この上ない喜びと、心ひき締まる思いがします。牧水は、大自然の中をひとり、大きな寂しさとおくがれをもって旅した歌人です。その歌は未来に向けて投げた夢であり、理想であり、その言葉を追いかけて牧水は旅をつづけました。今日、未来にどんな言葉を投げることができるのか、今回の授賞を激励として、歩みを重ねたいと思います。



歌集『花』

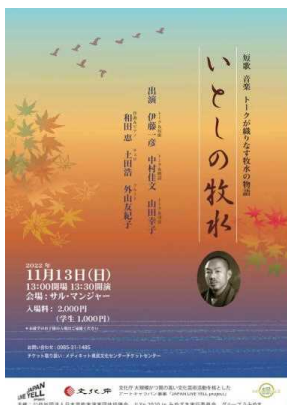
授賞式は来年2月21日(火)。翌22日(水)は高校訪問と受賞記念講演会が予定されています。そして、牧水が生まれたここ坪谷の地にもお越しいただく予定です。

これまで30名の歌人が若山牧水賞を受賞され、来年は総勢31名の歌人パネル、歌集、自筆原稿が並びます。発表時期が近づくと、密かにワクワクしていましたが、展示室に所狭しと並ぶ歌人たちを想像すると、もうワクワクが止まりません。奥田さんに喜んでいただけるよう、準備を進めてまいります。

二行分かち書き(1首を2行で表現)や異分野の人材との合作が収められているという受賞歌集『花』の到着が待ち遠しい。

(資料提供 若山牧水賞運営委員会)

行きませんか? ぜひ見てください!



行きませんか?

短歌 音楽 トークが織りなす牧水の物語 「いとしの牧水」

日 時 11月13日(日) 13:00 開場 13:30 開演
会 場 サル・マンジャー 宮崎市船塚2-17
入 場 料 2,000円(学生1,000円)
主 催 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
JLYp 2020 in みやざき実行委員会 グループうみやま
出 演 伊藤一彦館長 トーク&短歌
中村佳文 トーク&朗読
山田幸子 トーク&司会
和田 恵 作曲&ピアノ
土田 浩 チェロ
外山友紀子 フルート

ぜひ見てください！

三十一文字にかけた夏 ~ 熱闘！短歌甲子園 ~

先月、宮崎県で先行放送された『三十一文字にかけた夏~熱闘！短歌甲子園~』が全国放送されます。8月に日向市で開催された第12回牧水・短歌甲子園に出場した高校生たちに密着した番組です。全国の高校生が詠む三十一文字、覗いてみませんか。

11月3日(木) NHK Eテレ 19:45~20:29
11月11日(金) NHK Eテレ 0:30~ 再放送
初回放送終了から1週間、NHKプラスで配信予定です。



生家ノートより

若山牧水の歌にひかれて早数年、やっと牧水の生まれた生家を訪れることができました。この家から眺めることのできる山河はそのまま牧水の原風景なのだと感動しきりです。いつかまた再び訪れ、牧水の歌とともに味わいたいと思います。

河浪の音聞こゆなり古き家の牧水生れぬ浪、浪の音 (牧水生家にて一首)

牧水さんのおくさんは、私のしんせきです。久し振りにやって来ました。私も延岡高校卒です。よくコーラスで(うす紅に葉はいち早く)という歌を合唱していました。なつかしいです。

じいさん二人旅

楽しかったです。また来ます。牧水さんをわすれません。先人のなかで一番すきです。

私、ガンになり今年28日手術を行います。心やすめる為に妻と二人この地を訪れ、心おだやかに帰ろうと思います。ありがとう。

建築の仕事をしている者です。昔ながらの造りにとても感動しました。歴史を感じられてとても良かったです。

夕方、生家施錠の折にノートを開くのが常で、一日の疲れが一瞬にして吹っ飛びます。立ち寄られた方々のひとことに、いつも元気をいただいています。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

ちちいびいといわれの真うへに来て啼ける落葉が枝の鳥よなほ啼け

大正7年11月中旬、牧水は利根川上流の渓谷と温泉を巡る旅に出ている。

「木々の間にほしいままに遊び、ほしいままに歌う小鳥の声を聞くことは、牧水の旅の大きな目的の一つでもあったのである。これらの歌を読むとき、私は小鳥を深く愛する作者がひとり冬山の木の根にうずくまって、真上の落葉木の枝に遊ぶ小鳥を眺めている静かな姿をなつかしむというよりも、なんだか作者自身がその小鳥になって、うらかなしく澄んだ冬の日ざしの中に遊んででもいるかのような気がして、なんとも言えないなつかしみとともに、その底に流れている深い大きな哀愁にふれずにはいられない。」

(大悟法利雄著 鑑賞若山牧水の秀歌より)

同じ旅中に、次のような歌も詠んでいる。

枯れし葉とおもへる鳥のちちちちと枯枝わたり高き音をあぐ
手にとらばわが手にをりて啼きもせむそこの小鳥を手にも取らうよ

体調思わしくない時や多忙極まりない時であっても、牧水は旅先で出会った小鳥と対話をするように、何気ない一瞬をも切る取る繊細さを持っているのかと、この歌を読んで思いました。

みなさんは、牧水の歌の中でどの歌がお好きですか。